

事業経営の成否は「経営者が熱い思いを持ってやるかどうか」にあるといっても過言ではない。

よく事業計画の重要性が挙げられるが、計画自体は事業内容の説明ツールにすぎない。計画自体に価値があるのでなく、その前提となる

「熱い思い」と「事業の明確さ」こそが重要となる。

「こ」をはき違える」と、

「本音のWHY」というのは文字通り「何のために事業をするのか」で、事業の動機や目的のことだ。「こ」で重要なのは「建前」ではなく「本音」であるところだ。

いわての

風

事業計画構築の際、定型様式を埋めることばかりに気をとられるなど、目的と手段が逆転するという現象が生じる。

あくまでも「経営者の熱意と事業の具体性」、すなわち「一つは、建前ではなく本音のWHYを持つこと。もう一つは、事業の定義づけを明確にして実践すること」が本質である。

今回は、この二つのボ

イントのうち、紙幅の関係で二つ目の「本音のWHY」を取り上げる。

「本音のWHY」というのは文字通り「何のために事業をするのか」で、事業の動機や目的のことだ。「こ」で重要なのは「建前」ではなく「本音」であるところだ。

事業計画コンテストなどでは、事業目的として公共性・社会性も重視される。しかし、すでに名

をなした経営者を見ればお分かりの通り「金をもつけない」「良い暮らしをしたい」が、多くの創業動機だ。

よしんば、本音で「社会のため」と思ったとしても、すぐに市場の厳しい洗礼を受けるので、そこを乗り越えるしたたかさが必要となる。

新しいことに挑戦を開

新しいことに挑戦を開

事業に不可欠な「本音のWHY」

関 洋一 一関市・企業世話人



段階ごとに進化せよ

始めた途端、すぐに障害や課題に直面するというのが世の常で、事業経営も例外ではない。

そんな時、「建前のWHY」ならば、逆境を乗り越えるどころか、すぐにギブアップしたくなる。逆に「本音のWHY」は、歯を食いしばって立ち向かうエネルギー源や、事業を継続実践するよりどころになる。

本音なら「飯を食っため」でも「外車に乗りたい」でも良い。実際、若くして一部上場企業を築いたW社長の場合、父親

実は、創業期には前述

の事業失敗という屈辱を味わった小学生時代には「社長になって、世の中を見返してやる！」が本音のWHYだった。

最近の若者はハングリ精神がなくなったといわれるが、「貧しい生活はごめん」という本音のWHYが成立しやすかった時代なら、少しばかりの困難は苦にならず頑張れたのも道理だ。

さて、少々刺激的なこ とばかり並べたが、世の心ある方々もどうか安心してほしい。

ここが事業の帰すうを左右する分岐点だ。成功する経営者は一様に「世の中のおかげだとか」恩返しをした「とか、そんな謙虚さや感謝の気持ちの底からわいてくるので、この時点で「本音のWHY」にそった

せき・よついち 52年紫波町生まれ。東京理科大学。商社勤務、誘致企業取締役、県中小企業支援センター・プロジェクトマネジャーなどを経て現在は中小企業大学校講師、岩手大学客員教授、盛岡市創業支援マネジャーなど。

前述のW社長も今では「食および介護分野で環境に配慮し社会貢献する」というWHYが本音で付加され、世の中からもる手をあげて支持されます。ますます業績好調だ。

半面、この時点に至っても、我欲中心でカネの亡者を脱しきれない経営者が社会から抹殺される例は枚挙にいとまがない。

このように、創業時のWHYは、決して建前で大仰なことを掲げる必要はなく、事業段階ごとに本音で進化していけば良いし、それができなければ単純にそこまでということになる。

そして、これは事業経営だけに限らない。選挙間近の為政者たち(特に世襲議員)ははじめ権力に座する人々の「WHY」に、退化すら感じられるのは気のせいだろうか。